歴史教育

郷土史学習指導の一端

木許正生

中学校の社会科歴史学習において、地方史の取り扱いをどのようにすればよいか、の問題については学習指導要領にも示されているように、まづ日本史の流れを把握させるために郷土の歴史的史料をどこでどのように生かしていくかという問題と、指導に当つて、図式的・平板的なものとしてでなく具体的・実質的なものとして把握させることの必要なことが述べられている。とかく現実と遊離して観念的な学習に終りがちな学習に主体化をうながし、生徒に現実観をいだかせ、さらに郷土に生きる自覚と意識を高めさせていくうえで郷土史学習の占める地位もまた大きいわけである。それだけに教材としての取りあげ方また指導をする場合の方法などについての研究が必要となつてくるのである。

そこで第一に要求されてくるのは、世界史教材の取り扱いの場合と同じように、まず関連教材を整理し、（あらかじめ時代ごとに主なことをまとめて表などにしておくとよい）、歴史学習のどのような機会に郷土の教材を位置づけ、どのような方法で学習させていけばよいのかを検討せねばならないのである。

次に二つの例をあげてみることにする。

一、奈良時代の天平文化の学習をする場合。

天平文化の学習で郷土に残る国分寺の遺跡をとりあげ、まづ郷土の国分寺の跡（同時に国府・条里制なども）を地図の上で示し、その位置をはつきりさせる。そして塔や金堂の礎石、寺の由緒などを調べてみる。「グループ研究の型をとると、生徒各自でかなり広範囲にわたつて調査し、おもしろい結果がでてくる。但し事前に調査をする内容や素材の組み立て方、研究の方法などの指導が充分に行われていないと教師の意図するものとはちがつた結果になりがちな点を注意せねばならない。時間その他の事情でグループ学習のできない場合は、教師の準備してあるものを生徒の前に出し、前時間の学習と関連づけて話し合いをさせ――学級ですぐ話し合いのできる机の配置をしておくことが望ましい――資料をもとに、いろいろな角度から問題の設定を行わせながら学習をすすめていく」、生徒から出されてくることがらには、かなり直観的なものが多いが、それらを参考にして学習のすじみちをたてていくのである。

この学習の中でのいくつかの課題をあげてみると――生徒のもつている課題性でもある、――

1、このような寺院がどうして地方の国々につくられたのであろうか。
2、この頃の政治や社会のようすはどうであつたか。
3、国分寺・国府を中心とした都づくり（都城制）はどのように行われていたか―豊後（大分平野）と奈良との比較をしてみる。
4、寺院の配置は当時一般的であつたか。
5、この寺では、どんな仏像がまつられているか。どんな催しや行事が行われているか。
6、この地方の人々は、この寺をどんなに感じていたのであろうか。
7、国分寺のあつた場所は、現在ではどんなになつているか。いつ頃から変つていつたのだろうか。

このような取り扱いは郷土史を橋渡しとして日本史とのつながりを見究めていくいき方である。実際に指導する場合、文化史の学習は、ややもすると平板的な学習になりやすく、したがつて生徒自身の興味もうすく、理解も困難であり、単に文化的事象を整理していくといつたやり方になりやすいのであるが、郷土の文化遺産を中心に学習を展開していけば、そのような弊

害からまぬかれることにもなるのである。

二、鎌倉時代、蒙古来襲の学習をする場合。

蒙古来襲の学習では、特に九州を舞台としているので、直接に郷土史の具体的事象そのものが中央史の学習に結びつく教材である。

学習に当つて、まづ元寇の役以前、合戦中、元寇の役以後と学習する過程を三つの段階に定めてみる。三つの過程の中に含まれているいくつかの課題を段階ごとにあげてみると、

㈠　元寇の役以前

1、世界史との関連において宋から元に移りかわつていつたようすなどから、当時の中国の動きをつかむ。

2、蒙古が領土の拡大をしていつた経過を知り、日本にまで力をのばそうとした事情を理解する。

3、幕府の蒙古に対する態度や、当時の幕府内部の実情を知る。さらに幕府と地方武士との当時における関係なども学習する。

二、合戦の時

1、幕府が九州御家人に対してとつた対策と幕府が在地武士に示した態度はどうであつたか。

2、異国警護番役であつた豊後の守護、大友頼泰、貞親の出陣と郷土武士の活躍のもようはどうであつたか。

3、戦に対して示した民衆の態度はどうであつたか。

4、宇佐八幡、柞原八幡、六郷満山で行われた「敵国降伏」の祈願についてはどうか。

三、元寇の役以後のようす、

1、戦後も続けられた警備体制と、九州御家人の莫大な出費の実情はどうであつたか。

2、幕府と御家人、在地武士との関係はどのように変つていつたか。

3、戦後の御家人、社寺、庶民の生活苦と恩賞の要求、土地の売買、質入れなど当時の経済界の恐慌、幕府の出した徳政令とその反響はどうであつたか。

4、分割相続制から嫡子単独相続へのきざしと、惣領家と庶子家との対立からくる社会制度の混乱はどうであつたか。

以上のことがらについて郷土史料をもとに展開していくことによつて、郷土学習を通して中央史の学習に結びつけることができるのではないか。このように郷土史の学習によつて中央史の学習ができる教材としては、比較的に社会構造の単純な時代の学習の場合に多く用いることができるようである。

ここでは具体的な指導展開の実践例については記述をさけ、一般論として述べたのであるが、実際指導に当つては、かなり生徒の理解度や事象のかみくだきに留意し、学習が不自然にならないように中央史と併用する計画をとることを忘れてはならないと思う。

（大分大学学芸学部付属中学校教諭）

新刊紹介

『初期封建制の研究』

安田元久編、吉川弘文館刊
A5、三五一頁
定価 一、三〇〇円

これは北海道大学文学部の中世研究グループによる論文集である。そのうちに、福田豊彦「第二次封建関係の形成過程―豊後における大友氏の主従制を中心として―」および鈴木英雄「家督と惣領に関する覚書」の二論は、惣領制を中心とした武士団の結合の様態、家督と主従制、惣領・庶子と惣領地頭・小地頭など、中世における東九州の封建社会の進展を考えるときに見逃し得ない問題が述べられている。

大学院に在学中の、若いエネルギーがあふれる感じで、『大分県史料』が刊行ずみとなり、また田北学『編年大友史料』がすでに一〇巻をすましている現在、大分地方の中世社会の研究がいよいよ本格的な軌道にのつてきたことを知るのである。中世史を専攻するものばかりでなく、大分県の歴史（社会経済史、また家族制度史など）を知ろうとする人たちの一読すべきものである。

（富　来）